

# ああ、結婚！

第3回

黒田長宏

## DNA鑑定結果

7月31日は、ハンフリー・ボガート主演の『大いなる別れ』を観ていた。昼過ぎ、滅多に鳴らないスマホの着信音に、なんだろうと思って出てみたら、家庭裁判所からだ。6月に行った、妻の不倫出産の子と、私と、妻の三人のDNA鑑定結果を郵送したところ、不在のため戻ってきてしまったので取りに来いということだった。どうにもまた振り回されているような気がした。前号から、これを書いている31日までの間に、弁護士から上告棄却、すなわち、離婚決定の知らせは既に受けていた。

通知を受けて外出したので、高菜マヨネーズの豚丼を家裁に着く前に食べた。

せっかく出向いているので、今後どういう手続きが進められていくのかを、裁判所の事務官に聞いた。

帰宅途上には、もなか風のアイスをコンビニで買って食べた。美味しいものでも食わないと気分が滅入るからである。

どうでもいい事のようにだが、郵便屋の訪問時に不在だったりすると、こんなことになり、予定外の出費になる。

コンビニで駐車しながら、DNA鑑定結果などは眺めてしまった。調査員が言っていた通りの数値になって

いる。科学とは正確なものである。有無を言わせないのである。当然だとは思っていたが、そうでなかったら奇跡か魔法になるのだが、妻の(いや、元妻のと書くべきか、ちょうどその過渡期なので微妙な言い回しだが)その赤ちゃんは、やはり私ではない男性との子供だった。

最後の3枚に、私の写真、赤ちゃんの写真、元妻の写真とあって、赤ちゃんは元妻に大事に抱えられていて、元妻の写真も赤ちゃんを抱えている雰囲気がかかる具合に写っていた。配偶者と不倫相手との赤ちゃんの写真がわざわざ通知に入っているというのは、裁判手続きと言うのは、デリカシーに相当欠けているような感じも受けるのだが、どうだろうか。

離婚するものと誓って、最高裁に上告までして粘ったのにも関わらず、赤ちゃんと妻の写真をみると、赤ちゃんが生まれて良かったなという感慨だけが出て来た。私の気持ちも元妻からは離れて行く。

DNA鑑定した時刻も書いてあり、元妻と赤ちゃんが、綿棒で頬の内側をさすり採取したのが30分前。直前までここに居たのかと思った。

前回の調停では、一緒に会いますかと調停員に言われても、「もう会いたくもないので」と伝えて、会わなかったのは、私の意地を見せたつもりだったし、元妻が赤ちゃんを抱いているのを見たら、良い気はしなかっただろう。しかし、通知の写真では良かったなと思ってしまったのだった。

## 再び

そういうわけだから、不倫出産されたという抗議も出来たようだが、する気力もない。現実的に考えてみても、慰謝料を妻から得たところで、弁護士費用のほうが高いくらいだろう。50歳を超えて、さらに再婚が遅れてしまう。

筋を通すなら、はっきりと離婚決定がなされたのがわかってから、再婚活はすべきなのかもしれない。しかし私は、弁護士さんから上告棄却の知らせが来た数日後、茨城出会いサポートセンターに電話をした。

3年前の担当者が電話に出て、話の理解は早かった。担当者が思わず笑ってしまったほどの悲劇だったが、こんな話になったらもう笑うしかないだろう。再入会するには、新たな写真と再入会金と独身証明書がいると言う。独身証明を役所から得るためには、離婚が決定されていなければならない。ここが協議離婚と違って、7月31日の裁判所事務方の話では、2週間経過したら元妻が10日以内に申請すれば離婚になるが、10日を過ぎてもしていないようなら、私が裁判所と役所に行って離婚手続きが出来るんだそうだ。

だが、いずれにせよ、役所の電話に出た人が、独身証明書が発行出来るようになったら連絡するとの事なので、待てば良いのである。そして1ヵ月半過ぎても来なかったら、私のほうで手続きをする事になる。元々、元妻のほうで離婚したくて頑張っていたのだから、手続きはするだろう。

DNA鑑定代金は妻のほうで全部持つわけだし、私はその事件には弁護士を立てなかったが、元妻は立てていたので、さらに高い弁護士費用を支払っただろう。それが実質的に元妻へのペナルティーかなと、自分の都合で思うようにした。

ただ二審と上告には、法テラスと言うところが、弁護士料を立て替えてくれたために、これから数年間分割払いで半分は支払う事になる。この仕組みは助かるが、審査が通らなければならない。合格の判断をしてもらえたのには感謝だし、良い弁護士もいる。しかし弁護士にもいろんな人がいるようだから・・・。

## 心機一転

そして懲りずに、私はまた茨城出会いサポートセンターにお願いして、再婚活活動を始めるともりである。

全く告白を経験したことがないわけではないが、なかなか上手くいかず、相手が結婚しているか、恋人がいるのか、いないのかも分からない段階から、緊張や不安を感じてしまって楽に問い掛ける事が出来ない。それなら最初から、相手を求めているのがわかっているマッチング婚活のほうが、導入が気楽なのである。

ただしその分、競争相手に先を越されることもあり、取り残される。

特別な婚活組織にいらなくても、日常の出会いの中で、思い切って告白出来るような純な気持ちで居られたら、競合で複雑にならず、こんな現状にもならなかったのかもしれない。いや、そんな事などないか。三つ子の魂百まで。どうにも性格は変わらない。

## 決意

次回からは、婚活のほうに意識を強くし、実際に行動もしていく予定なので、チャレンジ的な明るいイメージに変化していくかもわからない。

大きな分岐となった47歳から50歳になってしまった3年間。こんな目に遭ったからこそ、この体験を無駄にしたくないのだ。体験ほかほかの時にだからこそそのリアリズムが生ずる。私という個性の特殊性はあるのかも知れないにせよ。また、辛い目に遭ってもユーモアを忘れない事は、精神的に大事だと思う。人によっては立ち直れない体験かもしれないと思う。そういう体験を本音でこうして書くのは貴重だと思う。なかなか体験しないと実態は見えないだろうし、体験者は少ないだろう。

長々と書いてきて、一言で言えば、裁判とは弁護士費用が大変にかかるとの教訓を得た。

<付記>

8月3日に、市役所から電話がかかって来た。独身証明書について連絡を待っていた件である。とうとう離婚が決定したことを実感した。独身証明書発行までは市役所側の手続きがあつてまだ1週間ほどかかるから追って連絡すると言う。

なんとしてでも再婚して、周囲の人達を見返してやりたいと思う。それは結婚というものでも愛でもない事はわかっている。しかしこの3年間、気持ちはそれだけグレてしまったのだ。復縁、修復に対する世の中の機能不全に対して、どれだけ孤独な思いをしたんだろうか。